愛知学院大学心身科学部紀要第13号（53–63）（2017）

保護者の箸使い教育とその関連要因

北川　千加良*1)　　渡邉　智之*1)　　森岡　亜有*2)　　末田　香里*1)　　酒井　映子*1)

【目的】保護者の箸使い教育とその関連要因を明らかにし，保護者の箸使い教育に焦点をおいた食育のあり方を検討することを目的とした．
【方法】調査対象は愛知県T市の公立・私立を含む幼稚園4園, 保育園8園の計12園に通う5歳児（幼稚園児206名，保育園280名）とその保護者に対するアンケート調査の両データが揃うもののうち，箸使いの回答不備や欠損データを除く418名（回収率94.7%，有効回答率86.0%）とした．園児の箸使いは観察法および面接聞き取り法，保護者は留め置き法を用いた．調査項目は園児では食習慣などの18項目，保護者には食意識などの44項目を取り上げた．
【結果】1．箸使い教育をしている保護者の家庭では，していない保護者の家庭よりも子どもが食事を残さず食べる（p=0.004), 食後に歯磨きをする（p=0.007）といった項目で有意差が認められた．2．箸使い教育をしている保護者は，していない保護者よりも正しく箸を持つことができる（p<0.001），日常的に食事前後の挨拶をしている（p<0.001），子どものおやつの時間を決めている（p=0.001），子どものおやつの量を決めている（p=0.001）などの項目で有意差が認められた．3．二項ロジスティック回帰分析の結果から，保護者の箸使い教育に関連する要因として，保護者の正しい箸使い（オッズ比 OR=6.471), 日常的に食事前後の挨拶をしている (OR=3.472), 子どものおやつの時間 (OR=2.170) を決めているといった項目で関連性が確かめられた．
【結論】箸使い教育をしている保護者は，園児の望ましい生活習慣づくりに寄与していることが認められた．また，園児の食事に対する配慮がされているとともに，食意識を高く持つことの重要性が示された．

キーワード：箸使い教育，家庭環境，生活習慣，食意識，食育

Ⅰ．はじめに

幼児期は生涯にわたる望ましい生活習慣や食習慣を身に付ける重要な時期である[1)]といわれているように，発達段階に応じた時期に着目して展開することが肝要であると考えられる．また，家庭が食育において重要な役割を有していることを認識するとともに，教育，保育等における食育の重要性を十分に自覚し，積極的に子どもの食育の推進に関する活動に取り組むこと[2)]が食育基本法に明記されている．幼児期は，家庭もしくは保育所・幼稚園等で過ごす時間が長く，食育の理念と幼児期の食育実践を通して，大人も積極的な食事への関わりを持つことが重要となる．

幼児期からの箸使いについて，一色は，生活の基本的なしつけは大脳が著しく発達する幼児期に決まるため，この段階で手先の使用が十分でないと大脳の順調な発達に影響を及ぼすと訴え，幼児期からの箸使いは日本人の脳と手の発達に大きく貢献してきた[3)]と述べている．保育園児の食事道具の持ち方については,「スプーン→フォーク→箸」の順で使われていることが広沢[4)]によって報告されており，宇都宮らは，正しい箸の持ち方の習得には，手指の発達段階に応じた教育をすることが重要である[5)]と指摘している．また，幼児期を過ぎ，就学すると箸の持ち方が鉛筆持ちと混同し

＊1）愛知学院大学心身科学部健康栄養学科
＊2）愛知淑徳大学福祉貢献学部福祉貢献学科
（連絡先）〒470–0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12　E-mail: chikara@dpc.agu.ac.jp

てしまうこと[6]から，家庭においては手指の発達に合わせた適切な箸教育を継続的に行うことが大切である．

このような観点から，前報において，園児の箸使いと家庭環境，生活習慣，保護者の食意識との関連について検討をした結果，正しく箸が持てる園児は30％弱と低く，箸が正しく持てる園児は保護者が箸使い教育をしていること[7]を認めた．また，正しく箸が持てる園児は，正しく箸が持てない園児よりも食事の時間を楽しみ，食事を残さないようにするなど，基礎的な生活習慣づくりが実践されていた．また，平成25年と27年の経年変化では，正しく箸を持てる園児，箸使い教育をしている保護者の割合は減少傾向にあった．T市の食育行動目標のひとつに正しい箸使いがあげられているにも関わらず，正しい箸使いができる子どもが年を追うごとに減少してきている背景として，子どもの箸教育を担うべき保護者自身が正しい箸使いができないこと，保護者自身が箸教育の必要性を認識していないこと，保護者が手間暇かけて箸使い教育をする時間がない食環境にあるなどが喫緊の課題と考えられる．

そこで，本研究では，保護者の箸使い教育に関する取り組みを改善するために，保護者の箸使い教育とその関連要因を明らかにし，保護者の箸使い教育に焦点をおいた食育のあり方を検討することを目的とした．

Ⅱ．方法

１．調査対象

調査対象は愛知県T市内の「こども育成課」管轄の幼稚園４園，保育園８園（認定こども園２園を含む）の計12園に通う５歳児（幼稚園児206人，保育園児280人）とその保護者の回答が揃うデータとし，箸使いの回答不備や欠損データを除く418名とした．回収率は94.7％，有効回答率86.0％であった．

２．調査期間

調査実施期間は，平成27年７月中旬から８月上旬である．

３．調査項目

園児に対しては箸使いと生活習慣に関するアンケート調査，保護者に対しては家庭環境や生活習慣および食意識に関するアンケート調査を実施した．

園児のアンケート項目には，園児の家庭における食育の実践度を評価するための18項目を取り上げた．保護者に対するアンケート調査は，家庭での保護者の食意識や園児の行動に関する40項目，箸の使い方についての４項目合計44項目を取り上げた．

４．調査実施方法

１）園児対象調査

調査者が調査対象園に出向き，アンケート調査項目について園児に対して個別に面接聞き取り式によって行った．箸使いは観察法により行い，調査員が園児に箸を実際に持たせて，正しく持てるか否かの判定をした．

２）保護者対象調査

保護者宛てに各園から自記式のアンケート調査表を配布し，家庭において記入をしてもらった後，各園で回収した．

なお，園児とその保護者の個人情報保護のため，個人が特定できないようにアンケート調査表にはコード番号を記入しておき，回収後に園児と保護者とのアンケート調査の統合を行った．

５．調査集計・解析

園児と保護者のアンケート項目で質問が重複している21項目に関して，園児の主観に関する項目と実際に調査員が判定をした園児の箸の持ち方の項目は園児の回答を，それ以外は保護者の回答を優先して解析を行った．統計解析については，保護者の箸使い教育と家庭環境要因，生活習慣要因，保護者の食意識との関連にはχ^2検定，また，保護者の箸使い教育とその関連要因について総合的に検討するために二項ロジスティック回帰分析を行った．集計・統計解析にはIBM SPSS Statistics24を用いた．

Ⅲ．結果

１．保護者の箸使い教育と家庭環境要因，生活習慣要因について

保護者が箸使い教育をしているか否かと，園児の家庭環境要因，生活習慣要因についての関連をみると，箸使い教育をしている保護者の家庭では，していない保護者の家庭よりも子どもが食事を残さず食べる（p=0.004）項目で有意差が認められた．また，箸使い教育をしている保護者の家庭では，していない保護者の家庭よりも子どもが食後に歯磨きをする（p=0.007）といった項目に有意差が認められ，園児の生活習慣の基礎づくりが実践されていた（表1–1）（表1–2）．

２．保護者の箸使い教育と保護者の食意識について

保護者が箸使い教育を実践しているか否かと保護者

表1−1．保護者の箸使い教育と園児の家庭環境要因，生活習慣要因について

	総数	箸使い教育あり		箸使い教育なし		p
	(人)	n	(%)	n	(%)	
朝ごはんを毎日食べるか	410					
はい		315	(97.5)	85	(97.7)	0.641
いいえ		8	(2.5)	2	(2.3)	
ご飯のときにいつもテレビを観るか	409					
はい		182	(56.5)	55	(63.2)	0.262
いいえ		140	(43.5)	32	(36.8)	
ご飯のときにもゲームをするか	410					
はい		29	(9.0)	7	(8.0)	0.785
いいえ		294	(91.0)	80	(92.0)	
ご飯の時間は楽しいか	409					
はい		271	(84.2)	74	(85.1)	0.838
いいえ		51	(15.8)	13	(14.9)	
ご飯のお手伝いは楽しいか	361					
はい		252	(87.5)	60	(82.2)	0.237
いいえ		36	(12.5)	13	(17.8)	
ご飯のときはお腹が空いているか	409					
はい		265	(82.3)	69	(79.3)	0.523
いいえ		57	(17.7)	18	(20.7)	
嫌いな食べ物があるか	410					
はい		221	(68.4)	67	(77.0)	0.120
いいえ		102	(31.6)	20	(23.0)	
嫌いな食べ物を一口でも食べるか	338					
はい		212	(80.9)	64	(84.2)	0.514
いいえ		50	(19.1)	12	(15.8)	
朝食は家族そろって食べるか	413					
いつも食べる		158	(48.5)	38	(43.7)	0.209
時々食べる		107	(32.8)	37	(42.5)	
食べることは少ない		61	(18.7)	12	(13.8)	
夕食は家族そろって食べるか	413					
いつも食べる		270	(82.6)	69	(80.2)	0.659
時々食べる		48	(14.7)	13	(15.1)	
食べることは少ない		9	(2.8)	4	(4.7)	
子どもは食事の時間に自分から話をするか	417					
はい		284	(86.9)	76	(84.4)	0.556
いいえ		43	(13.1)	14	(15.6)	
子どもは食事の手伝いをすすんでするか	413					
はい		250	(77.2)	69	(77.2)	0.942
いいえ		74	(22.8)	20	(22.8)	
マイ箸があるか	416					
はい		311	(95.4)	82	(91.1)	0.098
いいえ		15	(4.6)	8	(8.9)	
子どもは寝る前におやつを食べるか	414					
はい		20	(6.2)	10	(11.1)	0.110
いいえ		304	(93.8)	80	(88.9)	

注）χ^2検定

表1−2．保護者の箸使い教育と園児の家庭環境要因，生活習慣要因について（続き）

	総数（人）	箸使い教育あり n	（%）	箸使い教育なし n	（%）	p
子どもが自分でおやつを選んでいるか	412					
はい		252	(78.3)	73	(81.8)	0.558
いいえ		70	(21.7)	17	(18.9)	
子どもは朝食に野菜を食べているか	414					
はい		53	(16.4)	11	(12.2)	0.337
いいえ		271	(83.6)	79	(87.8)	
子どもは夕食にいつも野菜を食べているか	413					
はい		284	(87.7)	74	(83.1)	0.268
いいえ		40	(12.3)	15	(16.9)	
子どもは食事を残さず食べているか	414					
はい		176	(54.2)	33	(37.1)	0.004
いいえ		149	(45.8)	56	(62.9)	
子どもは食事中に「おいしい」と言っているか	416					
はい		307	(93.9)	82	(92.1)	0.553
いいえ		20	(6.1)	7	(7.9)	
子どもは食後にいつも歯磨きをするか	417					
はい		224	(68.5)	48	(53.3)	0.007
いいえ		103	(31.5)	42	(46.7)	
子どもはおやつを食べた後にいつも歯磨きをするか	417					
はい		31	(9.5)	6	(6.7)	0.406
いいえ		296	(90.5)	84	(93.3)	
子どもは食事を20分以内で食べることが多いか	418					
はい		100	(30.5)	34	(37.8)	0.189
いいえ		228	(69.5)	56	(62.2)	
子どもはよく噛んで食事をしているか	412					
はい		243	(75.0)	62	(70.5)	0.388
いいえ		81	(25.0)	26	(29.5)	
子どもは室内よりも外遊びが多いか	402					
はい		177	(56.2)	45	(51.7)	0.458
いいえ		138	(43.8)	42	(48.3)	
子どもと園での話をよくするか	415					
はい		279	(85.6)	72	(80.9)	0.278
いいえ		47	(14.4)	17	(19.1)	
子どもは習い事をしているか	418					
はい		196	(59.8)	52	(57.8)	0.735
いいえ		132	(40.2)	38	(42.2)	
子どもはいつも夜9時前に寝ているか	413					
はい		157	(48.5)	33	(37.1)	0.056
いいえ		167	(51.5)	56	(62.9)	

注）χ^2検定

の食意識についての関連をみると，箸使い教育をしている保護者は，していない保護者よりも正しく箸を持つことができる者が有意に多いことを認めた（p<0.001）．また，箸使い教育をしている保護者は，していない保護者よりも子どもの好きな食べ物が増えるようにしている（p=0.017），箸で食べる料理（和食）を作るようにしている（p=0.014），園での給食献立をいつも見ている（p=0.031）項目で有意差が認められ，園児の食事に対する保護者の配慮があらわれていた．さらに，箸使い教育をしている保護者は，していない保護者よりも感謝の気持ちを育てている（p<0.001），日常的に食事前後の挨拶をしている（p<0.001），よく噛んで食べるよう教えている（p=0.004），いろいろなものを食べるよう教えている（p<0.001），子どものおやつの時間を決めている（p=0.001），子どものおやつの量を決めている（p=0.001）項目で有意差が認められた（表２）．

表２．保護者の箸使い教育と保護者の食意識について

	総数（人）	箸使い教育あり n	箸使い教育あり （%）	箸使い教育なし n	箸使い教育なし （%）	p
食事中に子どもと会話をするようにしているか	418					
はい		295	(89.9)	85	(94.4)	0.188
いいえ		33	(10.1)	5	(5.6)	
食事によって家族の絆が強くなると思うか	413					
はい		298	(92.3)	79	(87.8)	0.182
いいえ		25	(7.7)	11	(12.2)	
子どもが小学生になっても食事を一緒にしようと思うか	418					
はい		325	(99.1)	90	(100.0)	0.482
いいえ		3	(0.9)	0	(0.0)	
感謝の気持ちを育てるようにしているか	415					
はい		287	(88.3)	60	(66.7)	<0.001
いいえ		38	(11.7)	30	(33.3)	
よく噛んで食べるように教えているか	416					
はい		283	(86.8)	67	(74.4)	0.004
いいえ		43	(13.2)	23	(25.6)	
いろいろな食べ物を食べるよう教えているか	417					
はい		315	(96.3)	78	(86.7)	<0.001
いいえ		12	(3.7)	12	(13.3)	
食事前後の挨拶をいつもしているか	416					
はい		303	(92.9)	72	(80.0)	<0.001
いいえ		23	(7.1)	18	(20.0)	
嫌いな食べ物であっても料理に使用するか	408					
はい		246	(77.1)	63	(70.8)	0.218
いいえ		73	(22.9)	26	(29.2)	
嫌いな食べ物を子どもと一緒に食べるようにしているか	408					
はい		243	(76.2)	59	(66.3)	0.060
いいえ		76	(23.8)	30	(33.7)	
子どもの好きな食べ物が増えるようにしているか	418					
はい		296	(90.2)	73	(81.1)	0.017
いいえ		32	(9.8)	17	(18.9)	
子どもの食事の手伝いは子育てに大切なことだと思うか	417					
はい		320	(97.6)	88	(98.9)	0.394
いいえ		8	(2.4)	1	(1.1)	

	総数（人）	箸使い教育あり n	（%）	箸使い教育なし n	（%）	p
子どもに食事の手伝いをさせているか	414					
はい		288	(88.6)	77	(86.5)	0.587
いいえ		37	(11.4)	12	(13.5)	
保護者は箸を正しく持つことができるか	413					
はい		283	(87.3)	55	(61.8)	<0.001
いいえ		41	(12.7)	34	(38.2)	
箸で食べる料理（和食）を作るようにしているか	412					
はい		306	(95.0)	79	(87.8)	0.014
いいえ		16	(5.0)	11	(12.2)	
子どものおやつの時間を決めているか	417					
はい		216	(66.1)	42	(46.7)	0.001
いいえ		111	(33.9)	48	(53.3)	
子どものおやつの種類を考えているか	415					
はい		85	(26.2)	15	(16.7)	0.063
いいえ		240	(73.8)	75	(83.3)	
子どものおやつの量を決めているか	418					
はい		237	(72.3)	48	(53.3)	0.001
いいえ		91	(27.7)	42	(46.7)	
園の給食献立をいつも見ているか	412					
はい		163	(50.6)	34	(37.8)	0.031
いいえ		159	(49.4)	56	(62.2)	

注）χ^2検定

3．保護者の箸使い教育に関連する要因の検討

保護者の箸使い教育と家庭環境要因, 生活習慣要因, 保護者の食意識に関する要因を総合的に検討すると，二項ロジスティック回帰分析の結果，箸使い教育に関連する要因として，保護者の正しい箸使い（オッズ比6.471，95％信頼区間2.970–13.865），日常的に食事前後の挨拶をしている（オッズ比3.472，95％信頼区間1.270–9.491）, 子どものおやつの時間を決めている（オッズ比2.170，95％信頼区間1.001–4.702）といった項目で関連性が確かめられた．他にも，有意な結果は得られなかったものの，園児の正しい箸使い（オッズ比2.223，95％信頼区間0.889–5.558），子どもは食後に歯磨きをしているか（オッズ比1.820，95％信頼区間0.896–3.697）の項目について，箸使い教育との関係性が高い傾向がみられた（表３）．

Ⅳ．考察

1．保護者の箸使い教育と家庭環境要因，生活習慣要因について

T市の「こども食育ガイドライン―就学前版―」[8]には，「正しく箸を持てる」が食育行動目標として定められている．前報では，園児の箸使いを通して家庭における望ましい食習慣の形成に寄与できること，園児の箸使いの適否は，家庭での保護者の箸使い教育の実施が重要であること[7]が確かめられた．保護者の箸使い教育と家庭環境, 生活習慣について検討した結果, 箸使い教育をしている保護者の家庭では園児が食事を残さず食べており，食後に歯磨きをするといった望ましい生活習慣の基礎づくりが行われていた．箸使い教育をする保護者は，園児との食事の時間に箸使い教育以外にも食育を合わせて行い，時間をかけて実践していると考えられる．箸は自然に持てるようになるものではなく，一定の訓練によって正しい技能を身に付けるものであり[9]，保護者が手間暇をかけて繰り返し訓練することを厭わない姿勢が園児の望ましい生活習慣

表 3．保護者の箸使い教育に関連する要因の検討

	n	（%）	オッズ比	95%信頼区間	p
箸は正しく持てるか					
はい	70	(25.7)	2.223	0.889–5.558	0.088
いいえ	202	(74.3)	1		
嫌いな食べ物があるか					
はい	190	(69.9)	1		
いいえ	82	(30.1)	1.114	0.508–2.443	0.788
朝食は家族そろって食べるか					
いつも食べる	127	(46.7)	1.183	0.435–3.213	0.742
時々食べる	97	(35.7)	1.851	0.656–5.228	0.245
食べることは少ない	48	(17.6)	1		
子どもは食事中自分から話をすることが多いか					
はい	234	(86.0)	0.474	0.164–1.368	0.167
いいえ	38	(14.0)	1		
よく噛んで食べるように教えているか					
はい	226	(83.1)	1.567	0.662–3.707	0.307
いいえ	46	(16.9)	1		
食事前後の挨拶をいつもしているか					
はい	243	(89.3)	3.472	1.270–9.491	0.015
いいえ	29	(10.7)	1		
保護者は箸を正しく持つことができるか					
はい	214	(78.7)	6.417	2.970–13.865	<0.001
いいえ	58	(21.3)	1		
箸で食べる料理（和食）を作るようにしているか					
はい	253	(93.0)	1.521	0.406–5.695	0.533
いいえ	19	(7.0)	1		
子どものおやつの時間を決めているか					
はい	168	(61.8)	2.170	1.001–4.702	0.050
いいえ	104	(38.2)	1		
子どものおやつの量を決めているか					
はい	190	(69.9)	1.249	0.565–2.762	0.582
いいえ	82	(30.1)	1		
子どもは食事を残さず食べているか					
はい	138	(50.7)	1.318	0.642–2.705	0.451
いいえ	134	(49.3)	1		
子どもは食事の時に「おいしい」と言うか					
はい	254	(93.4)	1.618	0.464–5.640	0.450
いいえ	18	(6.6)	1		
子どもは食後にいつも歯磨きをするか					
はい	174	(64.0)	1.820	0.896–3.697	0.098
いいえ	98	(36.0)	1		
子どもは室内遊びよりも外遊びが多いか					
はい	146	(53.7)	1.074	0.514–2.245	0.850

	n	（%）	オッズ比	95%信頼区間	p
いいえ	126	(46.3)	1		
園の給食献立をいつも見ているか					
はい	133	(48.9)	1.522	0.735−3.149	0.258
いいえ	139	(51.1)	1		
子どもの好きな食べ物が増えるようにしているか					
はい	242	(89.0)	2.039	0.694−5.994	0.195
いいえ	30	(11.0)	1		

注）二項ロジスティック回帰分析
従属変数　箸使い教育なし＝0，箸使い教育あり＝1（n＝272）
園児の性別，家族構成を調整因子とした

づくりの適否に影響を与えることが示された．

2．保護者の箸使い教育と保護者の食意識について

本研究において，箸使い教育をしている保護者の家庭では，保護者自身が正しく箸が持てることが明らかとなり，二項ロジスティック回帰分析の結果からも，箸使い教育の実践には保護者自身の正しい箸使いが強く影響していることが確かめられた．西岡らは，家庭での食育は子どもに理解，認識をさせる段階で，親が見本を示しながら何度も繰り返し行うことで習慣化される[10]と述べている．このことから，正しく箸が持てる保護者は自身も幼児期に箸使い教育を受け，繰り返し訓練を行ったことで箸が正しく持てるようになったと考えられる．また，前報で明らかとなったT市の園児と保護者の箸の持ち方の現状[7]から，今後正しく箸を持てる者は更に減少していくであろうと推察される．正しい箸使いについては，箸の機能性の向上や望ましい食習慣の形成という観点だけでなく，古き良き伝統的な日本の食文化の継承という点からも代々受け継がれていくべきものである．今後起こりうる伝統的な食文化としての正しい箸使いの衰退を押しとどめるためには，正しく箸を持てる者が現状では8割と比較的多い保護者の世代を中心とした，積極的な箸使い教育を実践する必要がある．これに加えて，食育の継続的な推進には，保護者の知識を深めることよりも意識を高めることで家庭での食育が実践されると述べた酒井らの研究から，園児に対する箸使い教育の向上をはかるためには，保護者が箸使いの意義と役割を学ぶだけでなく，保護者の食意識を高めること[11]が重要であると考える．

保護者の食意識の指標として保護者の食事の挨拶を取り上げ，園児の食生活との関連を示した名村らの研究では，食意識の高い群は低い群に比べて，園児の朝食時間が早い，家族揃って朝食を食べる，間食時刻は決まっている，食べ物の好き嫌いがない，食事の感想をいつも言う，食事の挨拶をする，帰宅後30分～1時間外遊びをする，といった項目で有意に割合が高くなった[12]と報告している．本研究においても同様に，箸使い教育をしている保護者は食意識が高く，日常的に食事前後の挨拶を実践し，園児の感謝の気持ちを育てるといったこころの育みを重視した食教育が実践されていることが確認できた．

特に，二項ロジスティック回帰分析で保護者の箸使い教育に関連する要因を総合的に検討したところ，日常的に食事前後の挨拶が深く関わっていることが確かめられた．食事の挨拶は食育の中でも実践しやすいものであることから，箸使い教育をする保護者は園児に食事前後の挨拶をさせているものと推察される．食事前後の挨拶は，食べ物に対して命の大切さや感謝の気持ちを伝えるものである．箸使い教育をしている保護者は食意識も高いことから，挨拶の意味を教え実践することで園児のこころの育みを重視した食育を展開しているものと考えられる．

また，幼児期の食生活は保護者に影響を受けているため，園児が望ましい食習慣を形成するためには，保護者の食意識の高さが重要となる[13-14]．幼児期からの食生活の乱れは，将来の生活習慣病発症のリスク因子となる[15]といわれている．本研究では，保護者の箸使い教育に関連する要因を総合的に検討したところ，箸使い教育をしている保護者の家庭では，子どもの間食のとり方が良好であることが認められた．幼児期の間食と保護者の食意識について桧垣の研究によると，保護者が間食の意義を子どもの楽しみだけと考えている場合には，間食の内容に問題がある[16]と報告している．このように，親の食意識の重要性が間食のあり方からも明らかとなった．したがって，保護者の箸使い教育

は望ましい間食の実践に影響をしており，子育て支援の一翼を担っているものと考えられる．

3．保護者の箸使い教育を通した今後の食育の展開

食育としての箸使い教育が，園児の望ましい生活習慣づくりに深く関わることを保護者が認識し，食意識の向上をはかるためには，自治体が箸使いについての問題を重要課題として取り上げ，それをテーマとした食育推進イベントを開催する必要がある．食育推進イベントでは，箸の機能性や役割だけでなく伝統的な食文化としての箸の存在を伝え，自治体と地域の飲食店が連携し箸で食べる料理を考案し提供を行うことで，地域の活性化にも繋がるものとおもわれる．箸使いのような地道な取り組みが必要なことに関しては，行政主導型だけでは保護者の生活環境への配慮や食の広がりに適応した箸の展開などを踏まえた取り組みには限界があると考えられる．手間暇かけて箸使い教育をする時間がない食環境にある保護者に関しては，地域のエンパワメントを重視した箸使い教育を展開することで，地域集団のもつ自主性を導き出し，個々人で考える力を養うことにより，箸使いだけでなく，幅広い生活習慣の基盤づくりを実践できる能力を管理栄養士の立場から支援することが重要であると考える．

V．結語

保護者の箸使い教育とその関連要因ついて検討した結果，箸使い教育をしている保護者は，子どもが食後に歯磨きをするよう指導するといった園児の望ましい生活習慣づくりに寄与していることが認められた．また，箸使い教育を実践している保護者は，子どもの好きな食べ物が増えるよう努めるといった園児の食事に対する配慮がされているとともに，日常的に食事前後の挨拶をするなど食意識を高く持つことの重要性が示された．

謝辞

本研究の実施に当たりご高配，ご協力をいただいたT市12幼保園，T市こども未来部こども育成グループはじめ関係者の方々に深甚の謝意を表する．また，調査の実施，データ入力などをしていただいた2015年度栄養教育学ゼミナール生，小川莉奈，中村有里，米山菜摘，脇田瑠里奈の各氏に御礼申し上げる．

付記

本研究は，第64回日本栄養改善学会（2017年9月，徳島市）にて発表した．

本研究は，愛知学院大学心身科学部健康科学科および健康栄養学科におけるヒトを対象とする研究倫理審査委員会による承認を得た（第1507号）．

利益相反

本研究に当たり，開示すべきCOI関係のある企業等の利益相反はない．

参考文献

1）山口和子（1985）：食教育，医歯薬出版，pp. 132−137.
2）農林水産省ホームページ：食育基本法，平成27年9月11日 法 律 第66号，http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/pdf/kihonho_28.pdf.
3）一色八郎（1990）：箸の文化史―世界の箸・日本の箸，御茶の水書房，pp. 195−233.
4）広沢洋子（1991）：保育所における箸の使い方について，日本保育学会大会研究論文集 (**44**)，124−125.
5）宇都宮通子, 五島淑子（2008）：「箸の持ち方・使い方」指導のための基礎的研究― 1 歳児から 5 歳児の実態と「伝統型」習得のための要点―，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第 **25** 号，337−351.
6）赤崎眞弓，小清水貴子，元田美智子，松野絵里，中路知恵，林 明子，小濱有里子（2010）：幼児期から学童期におけるこどもの食生活に関する実態把握―箸の持ち方調査を通して―，教育実践総合センター紀要，No. **9**, 129−138.
7）北川千加良，渡邉智之，森岡亜有，末田香里，酒井映子（2017）：園児の食育行動目標としての箸使いに関連する要因，愛知学院大学心身科学研究所紀要「心身科学」第 **9** 巻　第 1 号，9−17.
8）高浜市ホームページ：子ども食育ガイドライン（就学前版）表，http://www.city.takahama.lg.jp/grpbetu/ikusei/shigoto/guide1.pdf.
9）河村美穂，高橋 愛（2008）：箸の持ち方と食生活との関連―小学校低学年における調査より―，埼玉大学紀要 教育学部，**57**(2), 37−46.
10）西岡光世，塚田信，原田節子，桜井幸子，片海美智子（2008）：小児期の家庭での食育とその要因―家庭内要因と生活実態から―，日本女子体育大学紀要第 **38** 巻，1−11.
11）酒井映子，森岡亜有，北川千加良，末田香里（2015）：園児の家庭における食育の実践に保護者の意識が及ぼす影響，愛知学院大学心身科学部紀要第 **11** 号，67−77.
12）名村靖子，東根裕子，奥田豊子（2009）：保護者の食意識が幼稚園児の食生活，食関心に及ぼす影響，大阪

教育大学紀要 第Ⅱ部門 第 **57** 巻　第 2 号，27–36.
13）冨岡文枝（1998）：母親の食意識及び態度が子どもの食行動に与える影響，栄養学雑誌 Vol. **56**, No. 1, 19–32.
14）中西洋子，八木朋美（2006）：児童の食生活と保護者の食意識および家庭での食教育―低学年児童と高学年児童の比較―，京都教育大学紀要，No. **108**, 101–114.
15）杉浦令子，坂本元子，村田光範（2007）：幼児期の生活習慣病リスクに関する研究，栄養学雑誌 Vol. **65**, No. 2, 67–73.
16）桧垣淳子（2017）：幼児期の間食における保護者の意識と現状，中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要 第 **49** 号，35–39.

（最終版平成29年10月10日受理）

Bulletin of The Faculty of Psychological & Physical Science, No. 13, 53−63, 2017

Related the Factor Such as the Chopsticks Usage Education by Their Parents

Chikara KITAGAWA, Tomoyuki WATANABE, Ayu MORIOKA, Kaori SUEDA and Eiko SAKAI

Abstract

[Aim] It was aimed to clarify that the chopsticks usage education, 'How chopsticks use education and related factors and to examine the way of education focusing on parents.'

[Methods] The candidate subjects were 5-year-old children (206 kindergartners and 280 nursery school children) from 12 publics or private facilities in one city of Aichi Prefecture. Of these, 418 children and their parents provided completed questionnaires without an inadequacy in any chopsticks usage-related item or other missing data (response rate: 94.7%, effective response rate: 86.0%). The chopsticks usage of children conducted to investigated an observation method and some interviews, and the questionnaires completed by their parents were collected by visitation. The questionnaire included 18 dietary habit-related items for children, and 44 dietary consciousness-related items for their parents. In addition, the obtained data were compared with data from a dietary education-related survey involving 5-year-old children and their parents, which was conducted in the same district during the same period.

[Results] 1. In the households educating usage chopsticks by parents, a significant difference ($p = 0.007$) is found in the items such as children eating without left a meal ($p = 0.004$), brushing teeth after a meal ($p = 0.007$) was confirmed. 2. Parents educating usage chopsticks can have chopsticks correctly than their unprotected guardians ($p < 0.001$), they routinely greet before and after a meal ($p < 0.001$) and determining the snack time ($p = 0.001$) and determining the amount of children's snacks ($p = 0.001$) were a significantly differences found in items. 3. From the results of the binomial logistic regression analysis, it was found that parents used the correct chopsticks (Odds Ratio: OR = 6.471) as a factor related to education usage chopsticks of parents, greetings before and after meals on a daily basis (OR = 3.472) decided time of child's snack (OR = 2.170) was confirmed in the item that it related.

[Conclusion]Parents who educate usage chopsticks were admitted to contribute to creating a desirable lifestyle habit for children. Also, consideration was given to a diet of child and the importance of having high food consciousness was shown.

Keywords: The Chopsticks Usage Education, Home Environment, Lifestyle Habit, Consciousness to Eating Habits, Shokuiku